

# 保守運動の女性を「研究する」とは

〈寄稿〉 大佛次郎論壇賞を受賞して 鈴木彩加 大阪大学招へい研究員

私が生まれた1985年という年は、日本の女性政策史において象徴的な年だったように思う。女性参政権獲得から40周年。男女雇用機会均等法の制定。女子差別撤廃条約を日本が批准したのもこの年だった。その後も、89年には「セクシャル・ハラスメント」が新語・流行語大賞を受賞するまでに社会的認知が広まり、93年度からは中学校で、翌94年度には高校で家庭科科目の男女共修が始まった。性差別をなくそうと粘り強く活動してきた先人たちのおかげで、学校が世界のすべてだった頃は自分が「女である」ために差別されたという記憶はあまりない。内閣府の世論調査などをみると、家庭・職場・地域社会・慣習・法律・政治など社会の様々な領域において、学校はとくに「男女の地位は平等である」とする回答が毎回過半数を占める傾向がある。しかし、それでも学校が全くの平等だったかというところでもなく、中学校のときに家庭科は既に共修だったもの

## 「平等」享受した世代から見た不思議

の、女子は保育、男子は金工で分かれていたし、女友たちは「男子が学級委員長の方がクラスが締まるから」と教師に言われて学級委員長にはなれなかった。痴漢に遭って以来、通学路は私にとって安全な道ではなくなってしまう。先の時代の女性たちに比べて、こうした性差別的経験は徹々たるものだろうか、それでも大学に進学し、よく分からずまたま履修したジェンダー論の授業にはとても心惹かれた。



すずき・あやか 1985年、静岡県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。専門は社会学・女性学。大阪大学助教を経て現職。著書に第20回大佛次郎論壇賞を受賞した『女性たちの保守運動』(人文書院)など。



は、大学生活も終わりに近づいた頃だった。「ある程度」の男女平等な環境で過ごし、それを享受してきた私にとって、男女平等に反対する女性の存在はとても不思議に思えた。大学院に進学後、女性たちの保守運動を研究テーマに選んだ。

## ジェンダー再生産する私たちの社会

影響を受けた本を1冊あげると、Katee M. B. Leeの『Inside Organized Racism: Women in the Hate Movement』だろうか。合衆国の白人至上主義運動の女性活動家たちを調査して書かれた本である。合衆国の白人至上主義運動は本の人種差別的な運動に対して圧倒的にアンダーグラウンドで周縁的な存在だ。脅威、暴行、拉致の危険性をつけ離れ合わせの状況で、インタビュー調査を実施し、そこから得られた女性たちの語りから不合理性を鋭く浮彫りにしていく。その手腕鮮やかさに、夢中になって

が少なかった。ルポルタージュなどはぼつぼつと出版され始めていたが、事実関係をただ追いかけるだけでは学術研究にはならない。保守運動を学術的に「研究する」とはどのようなことなのか、ということをずっと考えていたように思う。もちろん、こうして本を上梓した今日でも、私がそれを十分にできているとは思っていない。

をくれる院生仲間にもめまろしくと研究に取り組めるという警戒な研究環境があったからこゝろで研究がうたと思つた。研究室の底冷えの酷さを気にならぬくらい

んだ。この本に出会ってからは、自分の研究の進むべき方向性が見え始めたように思う。 本書には「右傾化する日本社会のジェンダー」という副題をつけた。保守運動だからこそ観察されたジェンダーの作用がある一方で、私自身も含めてそうした運動に携わっていない人もまた、ジェンダーを維持し、再生産する社会構造や社会規範のもとで生きていることを忘れてはいけないという思いを込めた。昨年から続いている新型コロナウイルスのパンデミックは、世界中でジェンダーに関する状況を悪化させており、日本もまたその例外ではない。今回の受賞を励みとしながら、ジェンダー平等に資する研究ができるよう、引き続き精進していきたい。

い、院生仲間とは多くの言葉を交わした。 本書には「右傾化する日本社会のジェンダー」という副題をつけた。保守運動だからこそ観察されたジェンダーの作用がある一方で、私自身も含めてそうした運動に携わっていない人もまた、ジェンダーを維持し、再生産する社会構造や社会規範のもとで生きていることを忘れてはいけないという思いを込めた。昨年から続いている新型コロナウイルスのパンデミックは、世界中でジェンダーに関する状況を悪化させており、日本もまたその例外ではない。今回の受賞を励みとしながら、ジェンダー平等に資する研究ができるよう、引き続き精進していきたい。